

中世石造遺物の再検討

藤井直正

一、はしがき

近年における日本考古学は、周知の通り、各時代にわたってめざましい発展を続け、その成果には目を見張るものがある。こうした趨勢の中で、標題にかかげた石造遺物という分野ではどうなのだろうか。

私の狭少な知識でも、古代の中心大和で、近世以来好事家の関心を集めて来た、飛鳥地方に散在する、酒船石や須弥山石などと呼ばれている謎の石造物について、その本来の用途が遺構との関連において解明されつつあり⁽¹⁾、また奈良時代のすぐれた石仏がのこる奈良市高畑町に所在するいわゆる「頭塔」が、従来考えられていたように、土を版築にした仏塔の遺構であり、石仏はその四面に整然と配置したものであることが、奈良国立文化財研究所による発掘調査によって明らかになってきた⁽²⁾。

さらに、特記しなければならない大きな発見は、奈良県北葛城郡当麻町に所在し、古代寺院跡として知られる石光寺において、本堂の改築に伴う発掘調査で、古くからの伝承を裏づける凝灰岩製の仏像が出土し、これを本尊とすることがわかり、韓国における作例や仏堂でのあり方とのつながりから、日本の初期仏教寺院における弥勒信仰の展開に新しい資料を提供することになった⁽³⁾。

中世・近世の石造遺物は、こうした古代の遺例にくらべると、ニュースとして華々しく報道されることは少ないが、最近における学界の動向として、各地にのこる中世あるいは近世の石造遺物を歴史資料として取り上げ、地域史の解明に役立てようという試みが目立ってきたことを挙げるができるであろう。

こうした試みの事例として、福井市一乗谷に所在する特別史跡越前一乗谷朝倉氏遺跡の調査と並行して行なわれた、一乗谷の各所に散在する笏谷石製の石仏の調査⁽⁴⁾や、日本海沿岸航路による笏谷石製品の流通に関する研究⁽⁵⁾があり、大分県国東半島に所在する田染荘や都甲荘など一連の荘園調査の中で、国東半島一円に分布し、独特の形態をもつことから、古く天沼俊一博士が提唱された「国東塔」を、その所在地とこれを製作した在地土豪との関係で取り上げられている⁽⁶⁾。

大分県といえば、国東半島は各種各様の石造遺物の所在することで知られているが、これと並んで数多くの磨崖石仏のあることでも有名である。その中でも臼杵市の臼杵石仏群はその白眉であり、平成七年四月、従来の重要文化財から昇格して国宝に指定された。ホキ石仏・山王石仏・古園石仏・堂ヶ迫石仏の四群から成り、過去三十七年間にわたる修復と環境整備事業が完成して現代によみがえった。これと並行して磨崖仏周辺の考古学的調査が行なわれ、石仏の造立年代や造立時における状況等について新しい知見が加わり、またこれらの石仏群が造立された歴史的背景についても精細な考察が加えられている⁽⁷⁾。

こうした動向の中で、最近刊行された朝日百科日本の歴史別冊の「歴史を読みなおす」シリーズの「中世の村を訪ねる」では、大分県宇佐・国東の村や荘園を、さらに備後国太田荘とその外港であった尾道（ともに広島県）が取り上げられ、太田荘域や尾道にのこる石造遺物を資料として中世の村を考え、石造遺物造立の背景をさぐるうとする試みが鮮かに描き出されている⁽⁸⁾。

これまでも折にふれて述べて来たように、日本全国の各地にのこる石造遺物を「石造美術」の名称のもとに総括し、これを歴史時代考古学の対象として集大成されたのは、昭和四十四年の史学科創設以来、昭和五十三年に逝去されるまで、九年間にわたってわが大手前女子大学の史学科教授として在職された、故川勝政太郎博士の不朽の業績であることを忘れてはならない。先生の足跡は全国の各地に及び、自ら計測・手拓された膨大な資料の上に立って石造美術論を樹立されたのであったが、惜しむらくは、かつての日本考古学、中でも歴史考古学の各分野がそうであったように、古代・中世の遺品が主たる対象で、近世・近代の遺品まで及んでいなかったことと、各地域に存在する

遺品について、そこに遺品の存在する理由について触れられてはいるが、より踏み込んで各遺品の存在する歴史的背景を考え、またこうした遺品を資料として地域史を解明するところまで至られなかったということを指摘することができる。

最近における歴史学界の動向は、川勝先生の目標とされていたことをはるかに超えて、石造遺物を歴史資料として活かす方向で進められていることは喜ばしい。しかし、この世界において大先達であった川勝先生をはじめとする諸先学の業績を正しく継承し、また表面的な観察にとどまらず、遺品そのものの正確な実測と所刻銘文の精細な解読を合わせた考古学的方法を以て資料化することが必要であることを痛感する。

私の石造遺物への関心は、いまふり返ってみると、四十余年前の学生時代に芽生えていることに気づくのである。当時刊行されたばかりの川勝政太郎先生著の『石造美術と京都』や、戦前に刊行されていた『大和の石造美術』や『日本の石佛』などを古書店で見つけ、これらを携えて奈良や京都の社寺をたずねることからはじまった。昭和二十五年には、はじめて訪れた香川県で、現在は高松市に編入されている讃岐一の宮、式内田村神社に隣接する大宝院の境内で偶々見つけた石造宝塔二基が、一つは基礎を除いて完全にのこり、見るからに古色蒼然とした宝塔で、駆け出しの私の乏しい知識でも鎌倉時代を下らないものと見ることができたし、もう一つの方の塔身には、宝治二年（一二五四）の銘文のあることが肉眼でも読みとることができた。そこで両方とも実測図を作っておいた。後日、たしか三回生の時であったが、非常勤講師として来講されていた末永雅雄先生の課題でレポートとして提出した。これをそのまま、当時まだ面識はなかったが、川勝政太郎先生のお手許に「讃岐大宝院石造宝塔」として送ったところ、『史迹と美術』第三三七号に掲載され、後日、先生の学位請求論文であり、京都綜藝舎から出版された『日本石材工藝史』の図版に名前入りで掲載していただいた。

香川県にも数多くの石造遺物の所在することは、その後、卒業論文の作成のため、古瓦資料の採訪と寺院跡探訪の途次に接しているが、とくに積極的に調査したことはない。しかし、今回本稿において取り上げた志度寺の経塔と長尾寺の経幢は当時から着目していたものである。地元ではよく知られた遺品でありながら、これは石造遺物全般にわたって言えることではあるが、未だ考古学や中世史の対象として取り上げられたことのない資料である。

以来、今日に至るまで石造遺物には常々関心を寄せているのであるが、古代や中世の遺品はもとより、近世・近代に及ぶ広範・多岐にわ

たる石造遺物を、考古学の対象とし、これを地域史の資料として役立てる必要があると常々私は考えている。⁽⁹⁾

本稿は、石造遺物の調査・研究について、私が日ごろ考えている視点に立ち、最近、見聞することのできた狭山池の石棺についての所見を披露し、また以前から気にとめていた讃岐所在の石造遺物を紹介することにした。大方のご叱正・ご批判を仰ぎたい。

注

- (1) 飛鳥の石造遺物については、さまざまな書物に紹介されているが、新しい見解については、門脇禎二氏の『新版飛鳥―その古代史と風土―』(N HKブックス、一九七七年一月)、および同氏『飛鳥古京―古代びとの舞台―』(吉川弘文館、一九九四年一月)にまとめられている。
- (2) 大脇 潔氏「頭塔の発掘」(『古代史復元3 古代の宮殿と寺院』所収、一八八九年一月)他がある。
- (3) 河上邦彦・鈴木喜博氏「石光寺の発掘と出土遺物」(『佛教藝術』第二〇三号、一九九二年七月)、および奈良県立橿原考古学研究所編『当麻石光寺と弥勒仏概報』(吉川弘文館、一九九二年八月)
- (4) 福井市一乗谷朝倉氏遺跡調査研究所『一乗谷石造遺物調査報告書一』(一九七五年)
- (5) 垣内光次郎氏「北陸の石造品」新人物往来社「中世の風景を読む」4 日本海交通の展開』所収、一九九五年六月)
- (6) 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『豊後国田染荘の調査』I・II(一九八六―七七年)、および同『豊後国都甲荘の調査』(一九九二年)
- (7) 賀川光夫氏編『臼杵石仏―よみがえった磨崖仏―』(吉川弘文館、一九九五年五月)
- (8) 同書所収の石井 進氏「1宇佐・国東の村を訪ねる」2荘園と港―備後国太田荘と尾道―でくわしく述べられている。
- (9) 藤井直正「石造遺物調査の視点―史料化へのアプローチ―」(『市史紀要』第2巻所収、寝屋川市教育委員会、一九九〇年三月)

二、狭山池の改修と出土遺構

1 狭山池の改修史

大阪狭山市の中央にひろがる狭山池は、羽曳野丘陵と、その西側に連なる狭山丘陵との間を北流する、西除川と三津屋川を堰止めて築造された、周囲約四キロ、満水面積三八・九ヘクタール、灌漑面積約五七〇ヘクタールに及ぶ人工池である。

築造の歴史は古く、文献上では、『日本書紀』巻五、崇神天皇六二年条に、

六十二年秋七月乙卯朔丙辰、詔曰、農天下之大本也、民所恃以生也、今河内狭山埴田水少、是以其國百姓、怠於農事、其多開池溝、以寬民業、十月造依網池、十一月作荊坂池反折池

とあるのが初めてであるが、考古学上の所見では、六世紀末から七世紀後半にかけて築造されたと考えられている。

奈良時代には、行基が天平三年（七三一）に狭山池院と尼院を建立し、狭山池を修築したことが『行基年譜』に記され、鎌倉時代初頭には、東大寺の復興と再建に当たった勸進上人、俊乗坊重源が、建仁二年（一一〇二）から翌三年（一一〇三）にかけて、改めて狭山池を修築したことが、『南無阿弥陀仏作善集』に見える次の記事、すなわち、

河内國狭山池者、行基舊跡也、而堤壞崩既内山野、為彼改復、臥石樋事六段云々
によって知ることができる。

さらに近世初頭には、慶長十三年（一六〇八）に、豊臣秀頼が片桐且元に命じて、摂河泉三国の人夫と多大の資材を投じて修理したことが記録としてこのさされている。近代に入ってから、大正十四年（一九二五）から昭和六年（一九三一）にかけて大改修工事が行なわれ、この時、北堤の西辺に設けられていた西樋遺構から、古墳時代の石棺を利用した樋管が検出された。

2 平成の改修工事と中樋遺構

狭山池は、近年になって、かつてはこの池水によって灌漑の行なわれて来た下流域の耕地が、都市化現象の進行によって激減し、反つて河川の氾濫が起こりやすい状況になって来たため、池そのものを治水ダムとして改造・整備する大規模な土木工事が、平成元年度より実施されている。

この工事に伴って、池底に遺存することが予想される底樋の検出に備えて、これを対象とする考古学的発掘調査が、大阪狭山市教育委員会を主体にした狭山池調査事務所によって実施されて来たが、二カ所において底樋の遺構が検出され、これらの樋の構築と狭山池の改修にかかわる重要な事実の数々を知ることができることになった。その一つは北堤のほぼ中央にある中樋遺構、もう一つは北堤の東端近くで見

つかった東樋遺構である（図版二）。

このうち本稿で取り上げたいのは中樋遺構に使用されていた石棺についてであるが、まず遺構の概要を現地説明会資料⁽¹⁾を参照しながら摘記することにした。

中樋遺構では、近世の樋の最下段が検出された。上半部は大正年間の工事で破壊されていたが、現存部分の高さ一四六センチ、横幅一四七センチを測り、全体は箱状に作られ、一ばん前の部分には、平たい板状の石が敷かれていた。樋の両側には塀状に板が組まれ、池水が集まりやすく、堤側の土が流水によって崩れないようにする目的で設けられた、いわゆる「扇子板」がつくられていた。東側での幅四二五センチ、西側での幅四一八センチ、もとの高さは二二〇センチ程度と考えられている（図版三・四）。

その外側には、西側に六個、東側に五個、計十一個の石材を使用した石垣が築かれていた。計測値は、東側の幅五二〇センチ、高さ二三〇センチ、西側の幅四六〇センチ、高さ二四〇センチである（図版三）。この石材十一個のうち十個が家形石棺の身を利用し、二個を上下に底面を表にして積み上げられていた。東側の部分での右端は、石棺一個の上に長方形の自然石がのせられていたが、壁面になっている部分の下がわに重源による狭山池改修当時の碑文が刻まれていることがわかり、鎌倉時代の金石文として注目されることになった⁽²⁾。

以上のように、今回、狭山池の中樋遺構から検出され、近世の改修時に転用されていた石棺は図版四の表に示したように計十一個で、そのうち一個が二上山産の凝灰岩である他は、十個のすべてが長石と竜山石製と鑑定されている家形石棺の身である⁽³⁾。狭山池においては、大正から昭和初年にかけて改修工事の行なわれた際にも、西樋遺構で身六個、蓋二個、計八個の石棺が検出されている⁽⁴⁾。従って西樋と中樋を合わせると十九個もの石棺材がここに運ばれ、樋管として使用されていたことがわかる。

ところで、これらの石棺材がどこから運ばれて来たのかという点については、西樋の発見当時においても疑問が持たれ⁽⁵⁾、今回の調査においても強い関心が寄せられているが、明確な見解は出されていない。私は、これらの石棺材の大部分が竜山石であることから、その産地である播磨から直接運ばれたものと考えている。以下このことについて考察を進めてみたい。

大阪府下をはじめ近畿の各地の古墳におさめられている石棺の中には、竜山石製のものが数多く存在することが知られている⁽⁶⁾。狭山池が所在する南河内地方にも及んでいたとは考えられるが、実際に狭山池において検出されたように、樋管に転用して使用する場合においては、

一時に大量の石棺材を必要とするのであるし、そのためには古墳の石室から搬出するという作業を伴い、所によっては古墳を破壊するといふ行為も免れないのである。少くとも狭山池の周辺地域でこれだけの数の石棺を調達することは不可能であろう。また、狭山池の改修が重源上人という当代随一の仏教家によって行なわれた作善業である以上、そのためにわざわざ古墳を破壊して石棺を搬出するといった行為は考えられないからである。

これらの石棺の原材料となった竜山石は、現在の兵庫県加古川市と高砂市にまたがる竜山に産する凝灰岩で、今日でも石材の採掘が行なわれ、古代以来綿々と石材の切り出しと加工が続けられて来た。この地については、『播磨國風土記』印南郡大國里の条に記述があり、古くから奇勝として有名な「石の宝殿」の所在地としても知られている。⁽⁷⁾

俊乗坊重源は、治承の兵火で消失した東大寺の再建に当たって勸進上人に任じられ、その生涯の晩年をこれに捧げたが、各地に別所を営み、この大事業を推進した。

この中で当面の課題と直接つながりを持っているのが播磨別所であり、かつてここが東大寺領播磨国大部荘の故地であったこととの関連において重要である。

播磨国大部荘は、現在の兵庫県小野市浄谷町を中心とする地域で、そこには重源によって建立された浄土寺が所在し、いわゆる大仏様建築として有名な宝形造の浄土堂が現存し、仏師快慶作の来迎阿弥陀三尊像と共に国宝に指定されている。

東大寺領大部荘と浄土寺についての研究は、共に大手前女子大学の初代学長であった中村直勝博士が嚆矢であり、大部荘は大著『莊園の研究』の中で、浄土寺は『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第六輯で詳細に報告され、竹内理三氏も『寺領莊園の研究』や『日本上代寺院経済史の研究』の中で触れられている他、多くの方の業績がある。

昭和五十八年から六十二年まで本学史学科に在任していただいた故東郷松郎教授は、私も多大の学恩を得たが、在地において播磨国の古代・中世史の研究にすぐれた業績をのこされた。その中に「東大寺領播磨国大部荘と浄土寺―その成立と鎌倉時代における二、三の問題―」と題したご論考がある。⁽⁸⁾

これによって大部荘の歴史を要約すると、大部荘は往古の寺領をまとめて久安三年(一一四七)に成立した莊園で、建久元年(一一九〇)

重源の所領となり、大仏再建の功労者である陳和卿に与えられたのであり、ここに播磨別所が造営されたのである。その広さについては、建久三年（一一九三）の浄土寺所蔵文書に、

大部庄朽損四至傍示事

四至 東限大墓 西限賀古川
南限河内村 北限南条

とあるが、東は加古川、西は浄土寺のある浄谷までの約四キロ、北は東条川から南は片山辺まで約五キロにわたる地域であったと想定されている。

当時におけるこの地方の景観がどのような状況であったのか、今日においては知ることはできないが、おそらく原野がつづいていたのであろう。東大寺さらに重源にとっては、荘園としての機能を果たすためには原野の開発は絶対に必要な事業であり、播磨別所の造営はそのための中枢であったと考えられる。

加古川流域は、現在においても大小多数の古墳の密集地帯として知られているが、⁽⁹⁾ 大部庄だけではなくこの地域の原野の開発に際して古墳が破壊される場合のあったことも想像に難くない。そしてこれらの古墳内に納められていた石棺が各所に存在していたことも想定できるのである。

播磨国明石郡には、播磨灘に面して、古来「摂播の五泊」の一つとされる魚住泊がある。俊乗坊重源がこの魚住泊の修築を行なったことは、『南無阿弥陀佛作善集』に、

魚住泊 彼鳴者、昔行基并（菩薩）為人築此泊、而星霜漸積、侵損波浪、然間上下船遭風波、漂死輩不知幾千、仍遂并聖跡、欲復舊儀とあることよって知られるが、この事業の行なわれた年時は、建久七年（一一九六）の「太政官符」の記述から前年の建久六年（一一九五）であったことがわかる。

重源による魚住泊の修復と播磨別所・浄土寺のことについては私見を述べたこともあるが、⁽¹⁰⁾ いま改めて考えてみると、東大寺領の周防国から木材を運ぶことや、備中・備前の別所からさまざまな物資を輸送する海上交通路の確保であり、これに加えて播磨別所からの物資を搬出するための港津として重要な役割があったからである。加古川の本流をはじめ、明石川をはじめとする河川も大きな機能を持っていたの

である。

加古川流域から集められた石棺材は、竜山の原材採掘地に集結させたということも考えられるが、いずれにしても魚住泊から、想像をたくましくすると、木材を組んだ筏に乗せて海路を東へ、淀川（神崎川）をさかのぼり、当時まだひろがっていた河内湖を通り、大和川・石川をたどって狭山の地に搬入した。これが大胆ではあるが、私の想定している狭山池出土の石棺材の供給地と輸送路についての憶説である。

注

- (1) 狭山池調査事務所『狭山池江戸大改修―中樋遺構説明会―』、なお現地説明会は平成五年一二月八日に開催され、私も参加し、遺構を十分に見聞した。
- (2) 今回発見された石碑は、平成六年十月一日から十一月十三日を会期として開催された特別展「狭山池と重源上人」にレプリカが展示され、その図録に現物の写真が掲載されている(図版表紙)。また、右の現地説明会資料には判読文がのせられているが両者を比べると不明の部分が多く、現物と対照する必要を感じ、大阪教育大学教授丹生谷哲一氏と共に郷土資料館に赴き、レプリカの碑文によって検討を加えた。その結果は氏による判読文を中心としたご論考と合わせて別稿で発表する予定である。なお、この調査に当たっては、大阪狭山市立郷土資料館長小路堯郎氏のお世話になったことを付記する。
- (3) 現地説明会にのせられている表と配置図を図版四に掲げておく。
- (4) 末永雅雄博士「狭山池」(『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯、一九三〇年三月所収)。なお本文は『狭山池改修誌』(大阪府、一九三一年)に再録されている。
- (5) 末永雅雄博士『池の文化』(創元社、一九四七年六月)。なお本書は一九七二年に学生社から増補改訂版が刊行された。
- (6) 古墳時代の石棺については、とくに原材の産地と供給先をくわしく調査された間壁忠彦・葎子ご夫妻による一連の研究があるが、最近刊行された間壁忠彦氏の『石棺から古墳時代を考える』(同朋舎出版、一九九四年一月)にこれまでの研究成果をまとめられている。
- (7) 間壁忠彦・葎子氏『石の宝殿』(六興出版ロココウブックス、一九七七年)。
- (8) 東郷松郎氏『播磨国の古社寺と荘園』(しんこう出版KK、一九八八年三月)所収。本書は生前に先生からご惠贈をいただき愛蔵している。
- (9) 『加古川市史』(第一巻、一九八九年三月)。
- (10) 藤井直正「歴史時代考古学の視点」(『大手前女子大学論集』第一六号所収、一九八二年一月)

三、讃岐志度寺経塔と長尾寺経幢

1 志度寺と経塔

東讃の一邑、大川郡志度町は、波静かな志度湾に面し、西に奇勝五剣山、屋島、海上遙かに小豆島を望む、史実と伝説に色どられた景勝の地として知られている。

海岸に近く、高松と東讃を結ぶ街道に面した志度寺は、山号を補陀落山といい、四国八十八カ所霊場第八十六番札所として参詣者が絶えない。

文政のころ、讃岐出身の国学者中山城山が著わした『全讃史』仏廟志には、志度寺について次のように記されている。

是の寺十箇寺の一なり。寺記に云ふ。推古の御宇、大織冠鎌子大臣勅を奉じて。寺を讃の寒河の海濱に建つ。時に園小尼知法と云ふ者ありて、高島の漂木を以て、十一面観音像を作り、以て其の寺の本尊と爲せり。今の志度寺是れなり。其の後 天智の御宇に方りて、大織冠鎌子の女唐土に歸つぎ、玄宗の皇后と爲る。嘗て皇后面向不背珠及び管弦磬、泗濱石を以て、其の兄淡海公に寄す。讃の寒河の海に至りて。龍人の奪ふ所となる。是に於て淡海公惋惜の餘、惋潜行して其の地に尋ね來り、蜃女を以て妻と爲し、居ること三年一兒を生む。而る後に公、婦に諭げて曰く、吾は是れ淡海主藤原不比等なり。珠を奪はるゝの恨を以て此に到り汝と遇へり。汝能く珠を奪ひて復らんか、汝の兒を以て嗣と爲せんと。是に於て蜃女海に投じ珠を奪ひて返れり。遂に之を以て死せり。其の子は則ち房前大臣なり。因つて其の浦を謂つて房前の浦と曰ふ。其の珠今、竹生島の常行院に在り。持統帝の七年、房前大臣年甫めて十三、行基菩薩に請ひて、此の寺に於て其の母の追福を爲せり。因つて其の寺を請つて死度寺と曰ふ。今は志度寺と曰ふは轉訛せるなり。寛文中藩主英公寺領七十石を捨す。塔頭五箇。普門院、自性院、地蔵寺、林蔵坊、圓通寺

藤原不比等と蜃女（海女）との交わり、房前の出生をめぐる世にも不思議な物語であるが、謡曲『海女』の題材となり、風光明媚な志度の地を舞台とする伝承として親しまれて来た。

街道に向かって西面する仁王門は本堂、閻魔堂と共に寛文七年（一六六七）、時の高松藩主松平頼重の造立した建築で県の文化財に指定されている。また仁王門に立つ金剛力士像は鎌倉時代の作、本堂にまつられている木造十一面観音立像、脇侍の不動明王・毘沙門天立像は平安時代の作でいずれも国の重要文化財に指定されているすぐれた彫刻であり、伝承は別として、古刹としての当寺の歴史を物語っている。

さて、当寺の境内にはめずらしい石造遺物が存在しているのである。本堂から西方に向かった境内の西北隅に所在し、町の史跡に指定されている石塔群で、方形の基壇上にここに取り上げる経塔二基のほかに、大小とりまぜて二十数基の五輪塔と、壇の前方両側に立つ七重塔などの石造遺物が林立している（図版六）。昭和二十年代にはじめてこれを見た時の印象と興奮ははっきり記憶しているが、「海女の墓」とする地元での伝承を『讃岐名勝圖繪』の記事にたどってみることにする。

海人墓 毎年十月十七日より廿三日まで法事修行す。墓は古石塔にてありしを國祖君源英公新に御造立あり、墓の傍に経塔一対あり、是は房崎大臣、法花經十巻を書寫して御母堂追福のため奉納したまふなりといへり。

と記されている。これで見ると、おそらく壇の中央に立つ一きわ大きい五輪塔が、世にいう海女の墓なのであり、源英公すなわち松平頼重侯が新しく造立されたものであるとし、傍に立つ他とは形のちがった石塔を「経塔」とし、藤原房前が法花經十巻を書写して母である海女のために納めたということ伝えてるのである。

これらすべての石塔は地元で「白粉石」とよばれている軟質の凝灰岩で、松平頼重侯の造立とする中央の五輪塔、基壇前方に立つ二基の七重塔の他は風化の度が著しい。この中で注目されるのが、中央五輪塔のやや前方、左右に置かれている二基の塔で、原形はかなり失われているが、他には類例のない異形の、一見して鎌倉時代を下らない古色蒼然とした石塔である（図版七・八）。写真と略測図に見られるように、左右の石塔は製作手法も大きさも近似しているが、よく観察すると若干の違いを認めることができる。二基ともに扁平な石を組み合わせた方形の低い基礎の上に立てられている。塔身は円筒形で、そのふくらみと高さは少しのちがいがあり、内部が空洞になっていることが一般の宝塔と異り本塔を特色づけている。その上に直接乗せている笠も左右がちがっていて、右側の方はかなり形をくずしているがよく観察すると本来は八角形であったと推察されるのに対して、左側の方は方形で他の層塔の屋根が転用されているように思われる。おそらく右側のが原形をとどめているのであろう。この上には、右側の分には方形の彫り込みがあり、双方とも方形、七段に作られ、宝篋印塔の笠に

近い形をしているが、隅飾突起のないことからこれが本来の形で、軸部は相輪を彫出しているものと考えられる。この上端には浅い彫り込みがあり、現状ではほとんど原形をとどめていないが宝珠がのっている。本来は請花を伴っていたのかも知れない。

ところで、この二基の石塔の用途であるが、藤原房前云々といったことはともかく、やはり伝承として語り継がれて来たことと、塔身が空洞となっていることが如実に示しているように、納経のための設備としてつくられた塔、そういう意味での経塔と考えるのがもっとも妥当であろう。

同じような形、同じような用途を持った石造の塔は寡聞のためか知らないが、これを銅または鉄の、金属製にした場合、比叡山延暦寺の三塔の一つ横川の住僧覚超が、長元四年（一〇三一）に、かねて慈覚大師円仁が自ら書写した根本如法経を納めた木造の小塔を、そのまま地下に埋めるためにつくったという銅筒が想起される。⁽¹⁾ さらに経巻をおさめるためにつくられた遺物としては、少し年代は下るが、南北朝時代、正平十七年（一三六七）製作の島根県大田市、大田南八幡宮の境内に立てられている鉄製の塔がある。このころからひろまる六十六国廻国聖による納経にかかわる施設と考えられている。⁽²⁾ 同様な鉄塔は、兵庫県洲本市（淡路島）の千光寺に文保二年（一二二八）、栃木県日光市中禅寺に元徳三年（一三三一）、岐阜県不破郡垂井町の真禅院に応永五年（一三九八）在銘の遺例がそれぞれ伝えられている。⁽³⁾ 志度寺の経塔の造立年代については、他に類例がなく刻銘もないため断定はできないが、鎌倉時代の初頭と私は考えている。

2 長尾寺と経幢

志度町の南に接する大川郡長尾町は、東讃の中でも肥沃な平野がひろがり、古くからこの地方の経済・文化の中心的役割を果たして来たところである。

古くは南海道、近世には長尾街道とよばれた古道に面して建つ長尾寺は、四国八十八カ所霊場第八十七番札所で、寺伝では天平十一年（七三九）行基が創建し法相宗であったというが、現在は天台宗寺門派に属している。

街道に向かって南面する仁王門の前、参道を挟んだ左右に瀟洒な覆屋の建物があり、各一基の石塔が立っている。これが本稿で取り上げる経幢で、古くから当時の門前に二基の石塔の立っていることは有名であったらしく、『讃岐名勝圖繪』の図幅に描かれている。⁽⁴⁾ 明治二十六

年（一八九三）になって一ど門内に移されたが、同四十五年（一九一三）再び現位置に復されたということである。

この二基の経幢には、下方を除いて、はっきりと判読できる刻銘があり、造立年代が明らかであることから、石造遺物としての価値に加えて、金石文としても注意に上り、木崎愛吉氏の『大日本金石史』第二卷（大正十一年刊）や、昭和十三年に鎌田共済會から刊行された『讃岐金石史』に収録されている。

昭和十八年に「石造経幢」として重要美術品に指定されていたが、昭和二十九年に改めて文化財保護法により「長尾寺経幢二基」として重要文化財に指定された。永年の風雨によって亀裂が生じ、また讃岐の古い石造遺物と同じく、凝灰岩で作られていることから、表面の損傷の度が著しくなり保存が危まれるため、平成元年十月から同二年三月にかけて保存修理事業が行なわれ、面目を一新した。その詳細は『重要文化財 長尾寺経幢保存修理工事報告書』として香川県から刊行されている。ただし建造物としての報告書であるため、石造遺物としての考古学あるいは地域史の立場からの考察がまったく加えられていないため、私たちにとっては物足らないし、同書にのせられている精密な実測図も機械的で味気のないものであるが、図版として掲げておく（図版九・一〇）。石造遺物としての解説は、川勝政太郎先生の『石造美術辞典』から引用させていただくことにしたい。「長尾寺八面石幢」として次のように記されている。

高松（琴平）電鉄「長尾」駅の東。古い面影を残す道に面した門前の左右に、八面石幢が二基立っている。よく似ているが大きさがちがう。向って左のは、幢身は八面であるが、太い方柱に大面取をした形で、その下に線形座を据え、幢身上には八角の笠と低い宝珠を一石で作っておいてある。笠の軒反りのゆるいところや宝珠の形、どっしりとした幢身など、鎌倉中期の気分が出ている。幢身四面の上方に金剛界四仏の古風な梵字をあらわし、一面に「弘安六年（一二八三）歲次 癸未七月日」の刻銘がある。右の一基はそれを手本にして三年後に作られたもので、一面に「弘安第九天歲次 丙戌五月日、大願主大工……」と刻む。石幢形式は鎌倉初期からあらわれているが、遺品の数は少なく、長尾寺のものは屈指の古いものである。

さすが要を尽くした簡潔な文章である。文中、銘文の下方は現状では判読し難いが、『讃岐金石史』は「大施主、種部氏」としている。こうした形態の石造遺物は、ふつう石幢とよばれ、その起源は中国にあり、仏堂内にかける六角または八角に布を垂らす「幢」に粗型を求めることができる。中国では唐代から宋代に盛行し、幢身の内部に経巻を納めたり、幢身に経文を刻む形式で、文字通りの経幢であるが、

日本では笠塔婆形式となり、造立の目的も多様化したようである。

長尾寺の遺例は指定名称では経幢とされているが、その理由は報告書には記されていない。ただ指定説明のところで「経は塔身に納めてあったものであろう。塔身に空洞がある。」と記されているが、実測図を見ても現物を観察しても空洞の存在は認められない。従って本遺例は幢そのものに経巻を納めるのではなく、納経という行為の記念のために造立されたのではないかというのが、現在のところ私の懐いてい
る考えである。

なお、この長尾寺の遺例のほかにも、大川郡東部に当たる旧寒川郡の地域には、同じ目的で造立された石幢のあることが注目される。報告書にも「類似調査」として挙げられているが、長尾町の東に隣接する寒川町の新川庵に二基（うち一基に永仁三年（一二九五）の紀年銘がある）、さらに東の大川町には、筒野に地名のおこりとなった一基（文永七年（一二七〇）在銘）、同西教寺に一基（永和二年（一二七六）在銘）の石幢が所在している。⁽⁵⁾十三世紀の後半から十四世紀の後半、すなわち鎌倉時代から南北朝時代にかけて、なぜこの地域に石幢が集中して存在しているのか。長尾寺の遺例のように経幢として造立されたものとしたら、当代における仏教信仰の実態を示す資料としてその価値は多大である。

3 経塔・経幢造立の背景

志度寺には『志度寺縁起絵』と題する六幅（本来は七幅）の掛幅が伝えられ、国の重要文化財に指定されている。もちろん当寺の縁起を描いたもので、一幅の大きさは縦一六七センチ、横一一二センチ、筆者は各巻異り、製作は室町時代初期、応永年間（一三九四―一四二八）ごろとされている。

最近、この『志度寺縁起絵』が大西昌子氏によって取り上げられ、「地獄と龍宮と大寺と―『志度寺縁起絵』に見る―」と題する一文で興味深い論説を展開されている。すなわち、この縁起絵は三幅までが志度寺が出来るまでを説いた創建譚であり、残りの三巻は寺が出来て以後の蘇生譚ないし靈験譚から成っているとし、仏教以前の龍宮と仏教以後の地獄を核として、志度の地の他界観に結びつけてとらえ、美術史家としての立場から絵図の構成にも考察が加えられている。⁽⁶⁾

たしかに志度の地は、古代以来の霊地であり、瀬戸内海に面し白砂青松のつづく長い海岸線は近年まで景観としてのこっていたのである。こうした視点から志度をふくめた東讃の地域を考古学的資料から裏づけることも必要であるが、ここに取り上げた経塔・経幢の存在は、中世の遺物ではあるが、今日ではまったく失われてしまったこの地域の宗教的世界の復原に役立つように思えてならない。

『梁塵秘抄』巻第二におさめる「靈驗所哥六首」には、

四方の靈驗所は、伊豆の走井、信濃の戸隠、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成相とか、土佐の室生と讃岐の志度の道場とこそ聞け。(三二〇)

と、諸国の霊地・霊場と並んで志度の地をあげていて、当時、はるかな都にまで聞こえたところであったことを物語っている。大西氏の説かれる他界の聖地であったことに加え、志度寺の本尊十一面観音と山号が象徴しているように、志度の地は観世音菩薩のいます補陀落浄土でもあったのである。紀伊熊野の那智山をはじめ、平安時代末から鎌倉時代にかけて、全国の各地に営まれた経塚は、こうした古代以来の聖地に所在している。讃岐にも数多くの経塚が存在しているが、経典を地下に埋納する、いわゆる経塚とは別に、諸国の霊地・霊場を廻つて経典を納めるといった信仰もしくは習俗が別であり、それは後代の廻国聖につながるであろうが、志度寺の経塔はそうした信仰・習俗にかかわる遺物であったと考えられるのである。志度寺の石塔群は縁起絵二の画面に描かれていて興味を惹かれるが、縁起の流布と共に海女の墓、海女への供養のための納経といったふうに進展して行ったのであろう。

志度寺にはじまる納経の風習は、周辺の地域にも拡大し、十三―四世紀にかけて、同じく観音霊場であり、補陀落山の山号を持つ長尾寺では経幢の造立となり、相前後、連動しながら寒川郡の各地に多くの遺例をのこすことになった。これが、現在のところ私の到達することのできた解釈である。

わが国に現存する中世の石造遺物の中で、ここに取上げた志度寺経塔や長尾寺経幢に見られるような遺例は決して多いとはいえない。とくに経塔についてはまったく類例を思い浮かべることができないが、経幢の遺例として挙げるとすると、瀬戸内海を距てた備中国といつても山間部の岡山県上房郡有漢町ういかんに所在する保月ほづき六面石幢がある。花崗岩製、方形の台座上に六角柱状の幢身を立て、同じく六角形の笠をのせている。頂上にはもと請花と宝珠を伴っていたと思われるが、現状では別の小五輪塔がのせられている。総高三メートルに近い優美な石

幢である。これも川勝政太郎先生によって世に紹介された遺品で刻銘によって嘉元二年の造立であることが知られる。⁽¹⁾

六角と八角とのちがいがあり、弘安六年および九年造立の長尾経幢とは約二十年の距りがあるが、笠の手法などに共通性を認めることができ、こうした経幢の源流をさぐることも一つの課題であろう。

注

- (1) 保坂三郎氏「経塚概論」(雄山閣『新版仏教考古学講座』第六卷、経典・経塚、一九七七年六月所収)、および、景山春樹氏『比叡山』(角川書店、一九七〇年九月)等にこの銅筒のことが述べられている。
- (2) 三宅敏之氏「遺構と遺物」(雄山閣『新版仏教考古学講座』第六卷、経典・経塚、一九七七年六月所収)、および関秀夫氏『経塚』(ニューサイエンス社、考古学ライブラリー33、一九八五年三月)に紹介されている。
- (3) 千光寺の遺例は、一九六〇年八月に淡路信用金庫美術館編として刊行された『淡路の文化』に銘文と共に紹介されている。また五十川伸矢氏は最近発表された論文の中で、鋳物師に関連して触れられている(同氏「丹南の鋳物師」(新人物往来社『中世の風景を読む』信仰と自由に生きる)所収、一九九五年一〇月)。⁽²⁾ 真禪院の遺例は、同氏の論文にのせられている実測図によってその存在を知ることができた資料である。
- (4) 『讃岐名勝圖繪』の本文には「経筒二基(同処門前にあり)」とし、「経筒の図 およそ高さ一丈ばかり 今一基、銘に曰く 弘安第九天^{歳次}丙戌五月 日大願主云々」と記し、図をのせている。
- (5) 大川郡大川町に所在する筒野と西教寺の石幢については、『大川町史』(一九七八年二月刊)に簡略ではあるが紹介されている。
- (6) 『大仏と鬼―見えるものと見えないもの―』(朝日新聞社、朝日百科、日本の歴史別冊、歴史を読みなおす5、所収、一九九四年四月)
- (7) 川勝政太郎博士「伊行末系大工とその作品」(『日本石材工藝史』一九五七年一月所収)

四、あとがき

本稿では、狭山池に運ばれた石棺材との関連で、播磨地方に集中するいわゆる石棺仏の起源について言及すること、鎌倉時代のとくに律宗系寺院にのこされている結果石標を取上げるつもりであったが、その余裕がなかった。後者については、かねてより関心を持ち、資・史料の収集を進めている勝示遺構と合わせて、別の機会にゆずることにしたい。